

# 小型沖曳網による平成30年度(2018年度)1月期のアユ採捕調査結果

亀甲武志・西森克浩・孝橋賢一・大山明彦・久米弘人

## 1. 目的

アユの資源状況については、生活史の各段階において様々な手法により把握に努めているが、1～2月期においてはまだ体長も小さく、集群性も弱いため魚群探知機による調査でも資源状況を十分に把握しきれていない可能性が指摘されている。そこで小型沖曳網による採捕により資源状況把握を試みた。

## 2. 方法

平成31年1月30、31日にかけて図1に示した琵琶湖北湖の6水域で小型沖曳網により採捕調査を行い、水域ごとに採捕尾数、体型を調べた。

なお採捕に用いた沖曳網（開口部450×1600mm, 袋網の目合4mm）の曳網ロープは片袖130mとし、水深10m～17m(浅)の地点で1回ずつ曳網した。なお平成29年度はロープ長が230mであったが、平成30年度は130mであるため、平成29年度の1曳網あたりの採捕尾数はロープの長さによって係数

( $130/230=0.57$ ) を乗じて補正して、両年度を比較した。



図1 調査水域

## 3. 結果

平成30年度の1網あたりの採捕尾数は水域により37～2949尾と大きく変動した(図2)。平成29年度と比較して平成30年度の採捕尾数は地点によって大きく変動し、水深が深かった(17m)知内でよく採捕された。

平成30年度に採捕したアユの体長は平成29年度と比較して小さい傾向があった(図3)。地点による体長の違いは昨年度のような南のほうが北の地点より大きいという傾向は明らかではなかった。

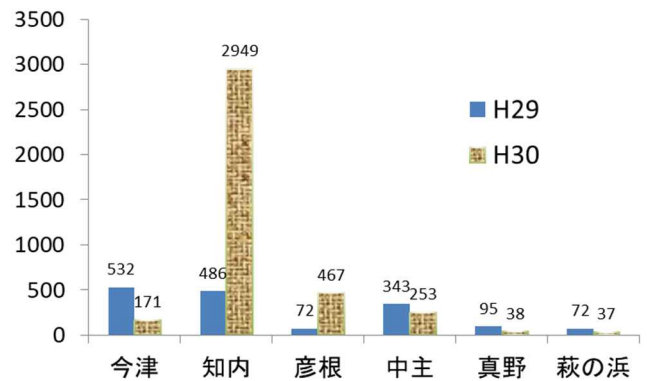


図2 1曳網あたりのアユ採捕数

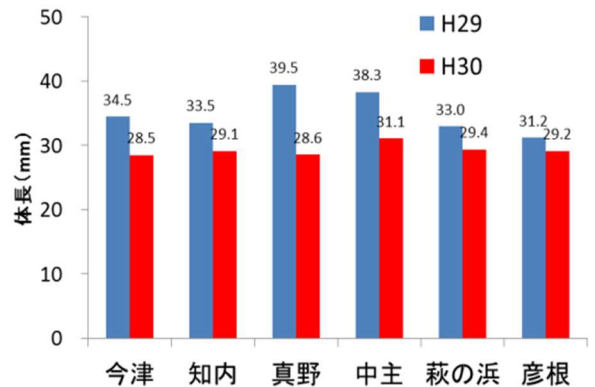


図3 採捕したアユの体長